中学校国語科学習を支える「国語学習記録」の実践
――学習記録の充実と活用――

寺本　学

一、はじめに

昭和五十三年四月、大学での学びと教育実習を終えて新任教師として現場に立った。学校現場の中で、当然のこととして、学年部に所属し、初めて学級を担任し、国語科を任せられた。

毎日毎日、次々と迫ってくる国語の授業。道徳、特別活動、放課後の部活動、研修、校内の教職員との人間関係、生徒指導に追われながら、とにかく休まず元気に生徒の前に立つことで精一杯であった。

教室へ向かう途中の廊下で指導書を開きながら次の授業を考える。教材研究や準備もままならないままに毎日の授業は進んでいく。結局、現場で手を抜くのは、国語の授業。自分に全ての責任を任され、一番大切にしなければならない国語の授業がおろそかになっている現実がそこにある。

悲しいけれども、指導書を頼りに、日々「あり合わせの力」で授業を続けていく。ここには、目の前にいる生徒を尊重し、理解し、国語の力をつけていこうとする国語教師の姿はない。

どんなに多忙な中でも、国語教師として採用されたからには、生徒に国語の力を付けていくことに全精力を傾けるのが本分ではないのか？悩みながら、たとえ小さなことしかできなくとも、昨日より少しでも自分で工夫を重ねていく今日の授業を目指したいと考えていくようになった。

わたしの国語教師としての出発は、神戸市であったが、部活動や生徒指導に明け暮れながらも、何か自分

にできる工夫はないかと日々苦しんでいた。そして、島根県採用になり、次に、附属中学校の国語科文部教官として勤務するようになって、ますます生活は多忙ではあったが、少しずつ自分の進む方向が見えてきたように思う。

「あり合わせの力」「持ち合わせの力」での授業との決別である。

わたしを支え導いてくれたのは、百名を越す会員が鎬を削って研鑽していた島根国語懇話会の講師や諸先輩である。附属中学校は当時、島根国語懇話会の事務局であった。会の運営に携わりながら、倉澤栄吉、桑原隆、安居總子、甲斐雄一郎、甲斐利恵子という中央の講師陣のもとで、国語教師のあり方を学んでいくことができた。また、先輩の授業や提案発表を間近で学び、授業実践について夜を徹して語り、相談し、試行錯誤しながら国語教育を考え続けいくこともできた。そして、その後の国語人生に大きな影響を与える特別講師大村はま氏との出会いも、この会がもたらしてくれたものだった。

附属中学校で毎年多くの教育実習生と出会い、指導していくことは、自分の授業実践を振り返ることであり、国語の力をつけるために学習材化を工夫し深めていくことでもあった。また、授業も常に公開し、研究会で国語科の研究と実践を提案発表していくことも、昨日より少しでも新しい工夫をめざして歩み出していきたい気持ちをいかすことにつながっていったと思う。

本稿では、中学校の国語教師として、目の前の生徒をどのようにとらえ、理解しながら、国語の力を育てていけばよいのかを、「国語学習記録」という視点で実践を振り返りながら考察していきたい。

二、「国語学習記録」とは

「国語学習記録」とは、一年間の学習で使用した国語学習の全てにかかわる記録のことである。

したがって、学習に使用したノート（ここではルーズリーフ）、一枚のプリント、ワークシート、学習の手引き、国語教室通信、定期テスト、硬筆コンクールや書き初め指導も含む書写に関わるもの、弁論大会の指導に関わるものなど全てを「国語学習記録」と考えている。いわゆるノート指導とは違いがあるのである。

写真１ 鹿島中Ｙ子の学習記録綴

そして、その全ての記録をふりかえり、新たな学習を織り込みながら、整理

分類し、題を付け、あとがき、奥付をつけて、「一冊の本」としてまとめていく。それが、最終の「国語学習記録綴」であり、「わたしだけの一冊の本」となる。

ここにあげたのは、平成二十六年度鹿島中学校一年生Y子の仕上げた「国語学習記録綴」の表紙である。

この綴りには、「世界」と題が付けられ、「世の中にはたくさんの「世界」があります。言葉の世界、本の世界、その他にもあると思います。この一年は、それらをじっくり考えた一年だったと思います。これからももっとたくさんの「世界」を見つけ、広げていきたいからです。」と、理由が添えられている。

翌年、平成二十七年度の一年生A子の「国語学習記録綴」は、次のような目次になっている。

題名　「ふりかり」

目次を飾る二編の詩（生徒作品）

1　ルーズリーフ　合計129枚
2　国語教室通信　合計31枚
3　学習記録から考える　合計103枚
4　音読劇場の記録　合計4枚
5　古典に親しむ　合計15枚
6　江戸からのメッセージ　合計3枚
7　弁論文作り　合計4枚
8　硬筆コンクール作品作り
　毛筆書写に関するプリント　合計8枚
9　三十秒音読の記録　合計5枚
10　中間・期末テスト、漢字テスト　合計33枚
11　その他のプリント　合計35枚
（季節のしおり、にじの見える橋、ことばのきまり、かくし絵、漢字関係のプリント）
12　大人になれなかった弟たちに（ミニ冊子）
13　一年二組　詩のアンソロジー（ミニ冊子）
　あとがき　奥付

これが、一年間かけて積み上げ、整理・分類した、六百ページを越えるA子の「わたしだけの一冊の本」である。

この実践でも「国語学習記録綴」は、点線で囲んだ三つの学習記録が主体になって作成されている。

1　ルーズリーフ　合計129枚
2　国語教室通信　合計31枚
3　学習記録から考える　合計103枚

この中の、「1 ルーズリーフ」は生徒の日々の学習中の記録であり、ノートにあたるものである。「3 学習記録から考える」は、生徒のルーズリーフの記録や感想、作文から生まれた学習材である。どちらも、生徒にとって大変価値のある、日々自分の力で積み上げた尊い学習記録である。

また、「2 国語教室通信」は、指導者が発行する生

徒に向けての国語情報紙である。週一回の発行を原則にして、折々の国語に関する情報や教科書の発展資料などを取り入れて、教科書と併せた国語科の学習材の一つとして大事に扱ってきたものである。

三「書くこと」のはたらき

「今日のノート」[1]に、次のような記事があった。

「大阪市内で映像関係の仕事をする下之坊修子さん（６６）は昨夏、幼いころダムに沈んだ生家に近い、大阪府河内長野市の山に古い空き屋を買った。／４０歳で離婚し、長年都会のど真ん中でひとり暮らし。何でも店で簡単に手に入り、情報も人との縁もインターネットで得た気になれる生活は、便利だけれど、どこか実感に乏しい。／「感覚を取り戻したい。面倒くさいことをして暮らそう。」と思ったのが田舎暮らしの動機だ。（中略）／自分がきょう一日やったことを、可能な限りＡＩに任せるとしたら、何が残るかと考えた。「どうしても譲れない物」がそう多くない気がして、がくぜんとした。下之坊さんの、「面倒くさくて手応えのある、人間らしい日々」という言葉に、むしょうに心がひかれる。編集委員 森川暁子」（傍線は筆者。以下同じ）

学習記録を継続して「書くこと」は、面倒くさいことである。しかし、面倒くさいことだからこそ、学習の実感を育て、人間らしさを育てていく重要な要素になるのだとわたしは考えている。

そして、大村はま氏は、「書くこと」について、

「書くことによって、思いのみによって悟り得なかった心を悟ることがあります。疑問を抱いて、その疑問を一心に書き進みますうちに、次第に心境が拓けて、思いがけぬ解決に達することがあります。実に「書く」ということは、散り易い心を一にし、物事の深奥へと知らず識らず人の心を導くものであると思います。[2]」

「その勉強のなかで、書くことの、表現と並ぶもう一つの世界を知った。わかったことを書き表すことと並んで、わかるために書く世界である。はっきりしないこと、つかめない気持ちや考え、それをとにかくことばにしているうちに、次第に、事情でも、気持ちでも見えてくる。自分の心のなかがつかめてくるという体験である。学習法としての書くことのはたらき、学習法のなかに書くことの占める位置を知ったのである。

これは、学習記録の位置づけを不動のものにした。単なるメモ帳でもない、忘れてはいけないことを記しておく、いわゆるノートでもない、学習をとらえておくものではなく、書くことによって学習を開いていくのである。たとい優れた記録にならなくても、それを書いたことによって、その人のうちに育っているもの、書くことによってみがかれる力が貴重なのである。[3]」

と、学習記録の位置づけを不動のものにした二つの大きなはたらきを明らかにしている。

四、学習指導要領と国語学習記録による「書くこと」

平成二〇年九月の文部科学省『中学校学習指導要領解説 国語編』[4]では、「第2章 国語科の目標及び内容」の（2）「B書くこと」の中で、「書くこと」の指導事項を次のように五つに分類している。

○課題設定や取材に関する指導事項
○構成に関する指導事項
○記述に関する指導事項
○推敲に関する指導事項
○交流に関する指導事項

この中の次の二つ指示事項を意識して、わたしは国語学習を構成しようとしてきた。

○記述に関する指導事項
　記述の仕方を工夫することを示している。第1学年では根拠を明確にして書くこと、第2学年では相手に効果的に伝わることを意図して、説明や具体例を加えたり描写を工夫したりして書くこと、第3学年では論理の展開を工夫するとともに資料を適切に引用するなどして書くことを示している。
○交流に関する指導事項
　書いた文章を互いに読み合い、自分の表現に役立てるとともに、自分の考えを広げたり深めたりすることを示している。
　書いた文章を読み合うことについては、他の指導事項との関連を図りつつ、第1学年では意見を述べたり自分の表現の参考にしたりすること、第2学年では意見を述べたり助言をしたりすること、第3学年では評価して自分の表現に役立てることを示している。

国語学習記録を日々継続して書くこと、そして、それぞれの学習記録を活用して、お互いを交流させ高めていく帯単元「みんなの声」「学習記録から考える」などを組むことは、右の指導事項の「記述」と「交流」のねらいを達成していく重要な国語学習として位置づけることができると考えている。

五、単元「わたしの本作り」（国語学習の記録を綴る）

毎年、「先生、もうファイルが厚くなって綴れません。」「もうファイルがぼろぼろです。いつ、本作りをしますか？」三学期に入ると、生徒からこんな声が聞

こえてくる。いよいよ学習ファイルが一冊の本となる時である。

国語科は、学習したことがすぐに結果として見えてきにくい教科である。生徒自身も自分のしてきた学習を目に見える形で実感できにくいところがある。

大村はま氏は、紅葉川中学校での実践の歩みをふりかえって、こう述べている。

「国語の学習帳は、他の教科とちがって学習帳そのものが国語の学習である。（中略）学習帳の指導は、少し骨の折れる仕事ではあるが、それだけにある日意外な成果に気づいて驚かせられるほど、効果の大きいことである。[5]」

「いわゆるノートでなく、自由に何回でも紙の出し入れのできるとじ込み式のものを使う。これにけい紙を入れて使うのであるが、学習活動の展開につれて、ある時はけいのない紙、その他いろいろの形の紙を使うことができる。（中略）一単元ごとに、表紙からはずして、一冊子にまとめる。目次をつけ、あとがきを書き、奥付を書き、その単元にふさわしく装幀する。[6]」

大村はま氏の実践に学びながら、わたしは「国語学習記録」を実践研究の中心に据えてきた。目の前の生徒達に、一年の終わりに一四〇時間の学習をずっしりとした手応えとともに味わわせたい。自分自身で学習を積み上げてきたことを実感させたいと考えたからである。

そして、一年のまとめとして、学習記録を整理分類し、「本作り」を学習に組み込むようになっていった。

（1）一年後のイメージをつくる

一年間の学習のはじめに、単元「わたしの本作り」を紹介するところから国語学習は始まっていく。

実践を重ねていくと、後輩達は先輩が残してくれた「国語学習記録綴」（「わたしの本」）を実際に手に取り、一年後の「本作り」学習のイメージを具体的に作っていくことができるようになる。

先輩の「わたしの本」と出会い、そのずっしりとした手応えを感じ取ること。それは、学校を越えて、国語学習に取り組んだ先輩から届けられた後輩への何よりの国語学習のメッセージなのである。

松江三中の一年生は先輩の「わたしの本」を手に取った感想を次のように記している。

> 古川さんの本を見て、わたしはまず題名が素敵だなあと思いました。意味を見て、とってもいい題名だと思いました。あと、毎回の「感想らん」にたくさん書いてあって、みならいたいと思いました。わたしも来年、こんな本がつくりたいです。
>
> 一年N子

僕は、この本をぺらぺらとめくってみて「ギクッ」と思いました。それは、ルーズリーフの裏に、中間テスト勉強や自由勉強がきちんとしてあることです。だから僕もきちんとがんばっていきたいと思いました。そしてもう一つ、とても字がていねいだということです。僕は読んだときとても読みやすかったです。

一年M男

感想には、文字の丁寧さ、読み手に与える印象、ルーズリーフの書き方や活用の仕方、意欲についてなどが書かれており、「わたしの本」が、後輩の国語学習の材料となって、学習刺激を与えていることが分かる。

（2）記録を綴るために

①日々使用する学習ファイルの重要性

中学校に入学すると、どの学校でも、教科ごとの学習ファイルが配布され、ロッカーには、背表紙に教科と氏名を書いたさまざまな色のファイルがどの生徒も同じように並ぶ。（近年は、A4ファイルが中心になってきた。）

各教科の担当教師は、「プリントやワークシートを綴じておきなさい。」と指示はするけれども、どのように学習の記録を綴り、保管していけばよいのか？ファイルの表紙や背表紙を具体的にどう作ればよいのか？一年間どのように活用していけばよいのか？については、意外に指導していないことが多いようである。

写真２学習ファイルの見本

「国語学習記録」の充実をめざしている実践では、毎回の学習の記録を全て綴っていく学習ファイルを、指導者の指示どおりきちんと活用できないと、全ての学習が揺らいでくる。

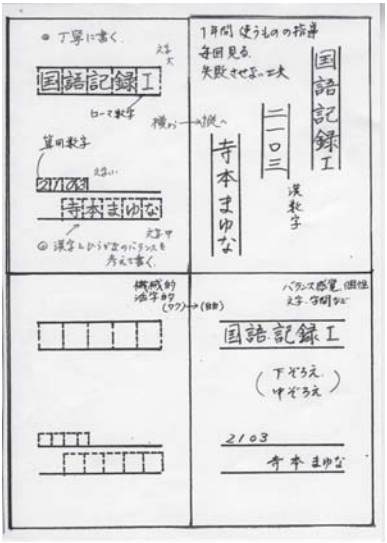
一学期の国語学習の中で、「記録をきちんと綴ることの大切さ」を生徒にどこまで意識づけできるかが、一年間の学習の正否を決めることにつながってくるのである。

②下書きの必要性

学習ファイルは、これから一年間、毎回の学習で繰り返し見て綴っていくファイルになる。だから、装丁の基本を思い出せるきちんとしたファイルにしておきたい。

そこで、次のような練習が必要となる。しなくても

いい失敗をさせる必要はない。上手下手はあっても、どの生徒も自信を持って自分の力でファイルを仕上げることができるようにすることが大切なのである。



（資料１）練習用手引き

（写真２）のようにファイルを作っていくためには、表紙、背表紙、縦書き、横書き、枠の大きさに応じた文字の大きさとバランス、数字の使い分け、丁寧さ、文字の太さ、濃さ、楷書と行書の違いなどの様々な文字感覚が必要となる。そのための練習用の手引きが、（資料１）である。一年後の「本作り」にも、ここで練習し実践したことが生きてくるのである。

③ 習慣化させるべきこと

わたしは、一学期初めの学習で、次の項目を繰り返し指導し、習慣化させるようにしてきた。

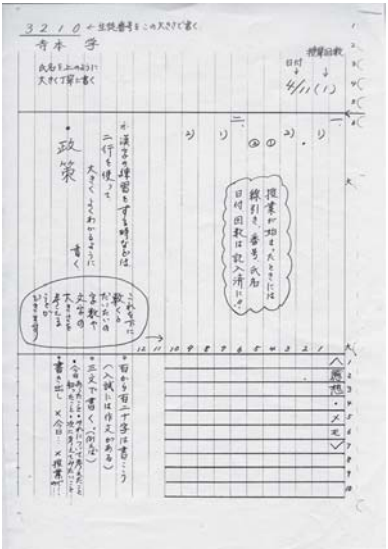
・学習の初めに、ルーズリーフに、日付、通算時数、生徒番号、氏名をまず書いておくこと。
・単元名、ねらいは、「黒板」を見て写しておくこと。
・枠と文字の大きさ、濃さを考えながら書くこと。
・文字の美しさより、丁寧に書くことを大切にすること。
・今日の学習で使用した学習の材料は、必ずその時間にファイルすること。
・国語の学習は、為すことの積み上げによって力がつくことを知り、実践していくこと。（百回やったことは、百回分の力となって蓄えられていくこと。）
・毎回、面倒くさくても、指導者の指示する観点に従って、感想等の短作文を書き、提出すること。
・毎回の学習記録（ルーズリーフ）が、次の交流学習を作っていくことを意識すること。
（注　自分たちの書いた感想や記録が次の学習の材料となって、学級や学年の生徒に広がっていくことをめざした帯単元を継続して実践してきた。単元名は、「みんなの声」や「学習記録から考える」である。）

もう一つ、生徒の「思い込み」を指導することも大切にしてきた。自分自身を振り返っても、ずいぶん後になって自覚した「思い込み」がいくつもある。大学

生になって、先生から指摘されて気づいた「ヲ」の書き順のこと。一画多く書いていた「展」の字の誤りを自覚させられたのも大学生の時のことだった。

自分では気づかないから、「思い込み」なのだ。生徒も自分のしている「思い込み」に気づくのは難しい。「思い込み」に気づくことは自分を高めていくことであり、気づかないままにしておくことが恥ずかしいことなのだという意識を育てていきたい。

④ ルーズリーフの記入の仕方



（資料２）ルーズリーフの見本

学習でのさまざまな内容を記録していくノートのかわりにルーズリーフを使用した。指導者にとって、ノートと違っていつでもどこでも記録をチェックしやすく、コピーしたり印刷したりするのにも便利だからである。

ルーズリーフは、ねらいにあわせて毎年少しずつ改良しながら、生徒に書き方や活用の仕方を示してきた。（資料２）はその見本の一つである。

⑤ 授業記録から見えてくるもの

鹿島中学校の第一学年、第一回目の二人（A男とB男）の学習記録を取り上げて考察してみよう。この年は、生徒の記録準備にかかる時間を少なくするためにルーズリーフを手作りで印刷し、年間を通して使用した。

（資料３）A男の学習記録

〈二人に共通していること〉

・字の美しさよりも、丁寧に記録することを大切にしていこうとしていること。

・罫に合う文字の大きさと濃さで書いていること。
・板書の内容を見て、箇条書きで記録していること。

この二人の記録から、中学生になって、新たな気持ちで指導者の話を受け止め実践していこうとする意欲を感じ取ることができる

（資料４）Ｂ男の学習記録

〈二人の学習記録から見えてくること〉
・A男の記録は、目標の①が「見通」で終わっている。また、二、綴をつくる の⑶の記録も途中で終わっており、「ローマ語」「表綴、北」も誤字である。

丁寧に書こうと努力しているが、黒板を写すときに、情報がもれることがあり、書くスピードも少し遅いタイプの生徒だと思われる。

・B男の感想には、漢字表現が少なく、読点を意味の切れ目に打つことができかねている。そして、「小学校の国語とわ|ちがう…」と助詞を誤って表記している。

授業中の発言はしっかりとできているようだが、小学校で身に付けておくべき助詞の基本的な使い方や漢字を適切に交えて文を書く力が定着していない。また、読点がなく、意味の切れ目を表現することができていない。中学校の初めに、細かく基本的な指導を重ねていく必要のある生徒である。

このように、一人ひとりの意欲や課題に気づくことができるのが、学習記録の魅力である。生徒一人ひとりの学習記録を毎回読み、チェックしていくのは、確かに骨の折れることではあるが、学習中の生徒の姿と重ねながら生徒理解を深めていくことができる大切な学習資料なのである。

六、国語学習記録のねらいと評価、そして効果

（1）学習記録から見えてくるもの

教員生活の最後となった鹿島中学校でも、わたしの

日々の国語学習準備は生徒の学習記録の一つである日々のルーズリーフを全員分読み、チェックすることが欠かせなかった。

教室の中で、一人ひとりの生徒に声をかけていくことはなかなか難しいことである。学習記録によって一人ひとりの生徒と関わっていくことで、その生徒の考えていることや苦しんでいること、今日の学習で考えたことや実態に近づくことができると考えている。

指導者は、一人ひとりのルーズリーフの記録を読みながら、今日の学習を振り返り、明日の学習へとつなげていく準備をするのである。また、生徒も、自分の記録を先生は必ず見てくれているという安心感を持てる、学習者と指導者が通じ合える場でもあるといえる。

もちろん、感想で書いたことが、その生徒の全てではない。教師が見ること、紹介されることを前提に書いているのだから、書いたことを「百パーセント本音である」とは考えないが、記録の中には必ず生徒の姿が現れてくる。学習記録に生徒の姿が浮かび上がってくるのである。

大村はま氏は、このように述べている。

「学習記録の一ばんのねらいは何ですか。」という問いに、「学習記録は、この書きなれ、そして、それによって筆無精でなくする、ということがねらいです。少し固く言えば、「書くことの基本を培う」ということです。そしてそれは、書くことの基本だけでなく、国語学習の基本に通じるといえると思います。ねらいはこういうことですが、学習記録には、まだ余滴のようなものがあります。子どもは学習を――その力も努力も――確かに見てもらっているという安らぎがあると思います。（中略）指導者としては、子どもの学習に肉迫するような実感があります。[7]」

（2）国語学習記録の指導と評価

〈指導に関すること〉

○生徒全員が書くこと。国語の時間の終わりには、必ず百字程度の短作文を書いて、全員が提出することをめざした。そして、書くことが当たり前の感覚を育てるようにした。

○一時間に一枚の記録（ルーズリーフ）を使用する。

○生徒の記録は全て目を通し、次の時間につながる内容の書かれた五～六名の記録を取り上げ印刷し、帯単元の準備をする。

○全員で、プリント「学習記録から考える」を見ながら、毎回授業の初めに、一人ずつ自分の感想を、自分の声で紹介する。（以前は、「みんなの声」）

○ここで、なぜこの記録を取り上げたのかを指導者が話し、その記録の価値を認識させる。学習記

録の取り方、メモの仕方、文字（筆順や形も含めて）、語い、感想や作文の視点、思い込みなどの観点を継続して指導していく場とする。

〈評価に関すること〉

○毎回、学習記録を提出させ、それをもとに、帯単元「学習記録から考える」を実践した。授業時間に取り上げ、発表する生徒については、学習した内容について何を考えたかの思考面を第一に評価し、紹介・発表の評価も大切にした。

○取り上げた学習記録については、その場で指導者がコメントを添え、価値づけをするようにした。

○提出した学習記録は、指導者側で十回分程度をまとめて、表現の面から次のことを評価した。

・板書に示したポイント、書くべき内容がきちんと書かれているか。

・感想の欄に、三文で書こうとしているか。指定した文字数を意識して書いているか。

・指定した文体（常体と敬体）で書かれているか。

・辞書を活用して、正しい表記、適切に漢字を交えた文にしているか。

（資料５）帯単元「学習記録から考える」

（3）国語学習記録の効果

「国語学習記録の効果」については、大村はま氏が学習帳の効果としてあげている次の七点[8]を参考にしたい。

（1）気軽に書く習慣をつける。
（2）幅広く各種のものを書く力をつける。
（3）考える方法としての「書くこと」を知る。
（4）書く力だけでなく、書かれたものを通していろいろな方向について、細かく評価できる。学習中の観察やテストなどで知りえない点まで、細かく、ひとりひとりの長短をつかむことができる。テストによって十分つかみえない、生活の実際に活用する力を見ることができる。
（5）指導の効果と欠点とをよく知ることができる。例えば、ある話をした場合、多くの者に、どう受け取られているか、ということがわかる。不徹底な点や、とりちがえられている点を、かなり確実に速くとらえることができ、したがって対策を立てやすくなり欠点を補いやすくなる。
（6）その他、指導が適当であったかどうか、ゆきとどいていたかどうかを、ありありと見ることができ、教師にとって、実によい反省材料になる。
（7）学習に関するいっさいのものが散らずに一まとめになっているので、教師が指導法その他について研究する場合に多くの便宜が得られる。

担当した中学生とは、次第に年齢は離れていったけれども、生徒の学習記録を通して、生徒に近づき、生徒の内にあるものに気づき、発見し、国語教師として生徒と共に学習していくことができたと感じている。

七、おわりに

読売新聞の記事「大学の実力 二〇一六」[9]では、今年の「大学の実力」調査のテーマに「書く力」を取り上げ、「書く力」の低下と大学生の実態を報告していた。

そこでは、多くの大学が、「日本語の文章の書き方を初歩から学ばせる取り組みに真剣に挑み始めた。それは、「書けない学生」の存在が深刻な問題となっているからだ。」と大学の現状を指摘している。

そして、岡山大学工学部では、授業の内容は「常用漢字で書く」「改行時は一文字空ける」などの初歩から始まる。また、創価大では、「リポートは必ず手書き。コピーできないから、資料を読み、考える力がつく。」と、授業での取り組みを紹介していた。

わたしたち中学校国語教師も、「書くこと」によっ

て、身に付いていく力や生み出されていく力を再認識して、日々の授業を組み立てていくことが重要である。これからの時代、日々の学習記録を、学習の中でどのように書かせ活用していくかが、ますます問われていくことになるであろう。書くことによって、磨かれ、心の中に育っていくものを辛抱強く育んでいきたい。

大村はま氏のことば通り、「書くことによって学習を開き」「書くことによってみがかれる力」を信じ、学習記録によって生徒とコミュニケーションをとりながら、国語学習を充実させていきたいものである。

最後に、わたしの実践を励ましてくれた附属中学校時代の生徒の「国語学習記録綴」のあとがきを紹介して、この稿を終えることにする。

あとがき　　中学三年生　J子

一年生の初めの頃はルーズリーフを書くことが大変に重荷になっていました。どのようにしたら美しくなるか、それだけを考えたりした時もありました。でも、だんだん美しく飾ることだけのためにルーズリーフを作るより、思ったことを、考えたことを、書き留めようと思うようになった。そしたらルーズリーフを書くのが楽になりました。やっぱり見掛けだけをつくろうとするより、自分らしさを表現した方が生きてて楽しいと思うようになりました。

（資料６）付属中での学習記録

先生が提供して下さった資料で多くのことを学び納得したり疑問が浮かんだり、いろんな知識がふえ、生活していても、「あっこの人はこないだ授業でふれあった人だ」と興味を持てるようになり、その人を通していろんな事を知れました。「みんなの声」では、クラスの一人一人の考え、自分とどういう風に違った視点で見ているか知れてよかったし、驚きもあり、刺激があり楽しかったです。

三年間、考えも心も成長できて本当によかったです。自分を褒めてあげたいです。そして、先生ありがとうございました。

あとがき　　中学三年生　N子

この三年間の国語で学んだことは、たくさんあ

ります。特に私は、文章を聞き取ることが出来るようになりました。最初は、「みんなの声」がいやでたまりませんでした。人が言ったことを聞き取って、ルーズリーフに書く。最初は、あんなにたくさん言っていることを、一言で書き表すことができなかったのです。しかし今では要点が読み取れるようになり、「いやだ」なんて思わなくなりました。そう思うようになった時、初めて楽しみながら出来るようになったのです。

国語では、知らず知らずに身に付いていたことが多かったような気がします。「みんなの声」をやることによって〝聞き取れる力〟。感想を毎回書くことによって〝書く力〟。人の感想を読んでコメントを言う〝自分の意見をみんなに伝える力〟など、たくさんの力がたった三年間で身に付けることができたような気がします。知らず知らずの間だから「○○の力を付けるんだ。」と思っていないので、その分だけ気楽にできたと思います。自分が書いているこの「字」だって、一年生のころに比べれば、成長した字になったと思います。

いろんなことが身に付いていった〝国語の授業〟。先生もたくさん私達に協力して下さいました。ルーズリーフにいつもつけるチェック表。最初は、「何のために…?」と思っていましたが、今考えてみると、先生が毎回つけてくれた〝赤い丸〟が、私にやる気を出させてくださったのだと思います。本当にありがとうございました。

この綴りを何年後かに見たときに「なつかしいな…。」と思えるような綴りにしたいです。

あとがき　　中学三年生　Y男

ぼくは、本をぜんぜん読まないので、少しずつだったけどたくさんの作品に出会うことができてうれしかったです。俳句や古典など国語の学習を通して学ばなければたぶん一生関わることもなかったのではないかと思います。通信や授業により様々な知識を得ることもできました。

（写真３）帯単元「みんなの声」

ルーズリーフにメモを取る力、感想をまとめる力など、国語の学習を通してたくさんの能力が身につきました。

三年間の学習を通して、一番自分で思ったことは、人間味、人間性ということです。同じ材料を使って学習しても、感想は一人一人のかかわりはあっても、みんな違った視点で見ていたり、違った意見を持ったり、たくさんのその人なりの感想が出てきます。みんなで俳句を作ったときも、グループによって選ぶ句は違いました。やっぱりみんな感じ方も考え方も違うんだとよく思いました。そしてこんなふうにものについての感想を持てる人間でよかったと思います。国語で作品を読んだり聞いたりすることで、読む力、感じとる力を身につけることができました。

これからもいろんな意見を持てる人間になりたいと思います。

引用文献

(1)「今日のノート」(二〇一六・六・二七付 読売新聞)

(2)『大村はま全集 第十二巻』八頁 一九八七・三 大村はま 筑摩書房

(3)『大村はま全集 第十一巻』二二頁 注5 一九八七・三 大村はま 筑摩書房

(4)『中学校学習指導要領解説 国語編』十五頁～十八頁 二〇〇八・九 文部科学省 東洋館出版

(5)『大村はま全集 第十二巻』五七頁 一九八七・三 大村はま 筑摩書房

(6)『大村はま全集 第十一巻』五七頁～五八頁 一九八七・三 大村はま 筑摩書房

(7)『大村はま全集 第十一巻』七六頁～七七頁 一九八七・三 大村はま 筑摩書房

(8)『大村はま全集 第十二巻』七二頁 一九八七・三 大村はま 筑摩書房

(9)「大学の実力」(二〇一六・七・八付け読売新聞)

[追記]本稿は、平成二十八年八月二日に行われた「島根大学教育学部国文学会研究発表会」での発表原稿をもとに、大幅な加筆修正を加えたものである。

(元鹿島中学校教諭、島根大学嘱託講師)